Ⅱ　東院園池と周辺の調査（第99次）

平城宮跡第９９次発掘調査は、東院地区東南隅にある園池跡を中心とする地域（６ＡＬＦ－Ｊ・Ｋ・Ｅ・Ｄ地区）で行った。１９６７年度に行った第４４次調査で、東院をめぐる大垣およびその内側に展開する園池跡の一部を発見した。今回の調査はこの園池の規模を明らかにするとともに、北方に向って次第に高まる地形のもとで、東面大垣および外濠がどのように遺存しているかを確かめることを目的とした。

発掘調査は１９７６年７月２６日に開始したが、諸般の事情から８月１９日に一応中止するに至った。その後、１０月６日から発掘を再開し、１９７７年１月１７日に調査を終了した。

発掘地域は北方から舌状にのびる台地が、沖積地に移行する部分にあたり、地山は砂地で軟弱であり、地下水位がきわめて高い。以下園池地区（６ＡＬＦ－Ｊ・Ｋ地区）と大垣地区（６ＡＬＦ－Ｅ・Ｄ・Ｈ地区）にわけて説明を行う。

Ａ　園池地区（６ＡＬＦ－Ｊ・Ｋ）

園池は上・下二層にわかれ、大規模な改修を受けている。発掘にあたっては、まづ上層遺構を検出し、その後に上層池のバラスの大部分を除去し、下層園池の全貌を明らかにした。このことから、遺構は大きくＡ・Ｂの２時期にわかれ、Ｂ期はさらに２小期に細分することができた。

１　Ａ期遺構

Ａ期の遺構としては、園池ＳＧ５８００Ａを中心に、掘込地業建物、石組溝がみとめられる。

園池ＳＧ５８００Ａは、上層園池ＳＧ５８００Ｂの下部にのこっていた。この池は大垣に沿って鍵手に屈曲してひろがり、東岸と北岸の汀線を確認するとともに西岸の一部も検出した。第４４次調査で検出した南岸から測ると、南北最大長約６０ｍとなり、東西最大幅約４５.２ｍとなる。

池の入江や岬は上層池によって破壊されている部分が多いが、大体の状況はたどることができる。東岸に岬２（ＳＸ８４５０、ＳＸ８４５２）と入江２がある。西岸には岬２、入江５がある。東岸の南半部分を除いて、周縁の池底に石敷が残存する。それは径３０㎝前後の扁平な安山岩を２～６ｍ幅で、地山の直上に敷きつめる。池の中心部分の底には石敷がみられず、細かい砂利を敷きつめている。地面から池に移行する岸辺は、地山を急斜面に掘りこみ人頭大の安山岩を積みあげた部分（西岸北方）とゆるやかな斜面に拳大の円礫を葦く部分とがある。こうした池は余り深くなく、現状では深さは５０㎝内外におさまる。

掘込地業建物ＳＢ８４８０は、下層園池の西岸が鍵手に屈曲し、半島状に張り出す部分につくる。遺構は東西に長い口字形の掘込地業である。幅2.5～３ｍ、深さ1.5ｍの掘形を南北１１.5ｍ、東西7.5ｍの範囲にめぐらす。掘形の底には人頭大の石を多数投げ入れ、その上で青灰色粘土と砂とを交互に積み固めている。礎石の存在を示す根石などは残っていない。このような掘込地業の上をＢ期の整地土（茶褐色粘土層）が覆っており、この建物の基壇はＢ期の改修時に徹底的に破壊されたことがわかる。なお、建物としては桁行３間、梁間２間程度のものが想定できる。

石組溝ＳＤ８４５６は下層園池の東北隅に流入する南北方向の溝である。幅１ｍ内外の掘形を掘り、底に扁平な石を敷き側石を立てたようだが、側石はすでに抜きとられている。ＳＧ５８００Ａに北方から水を供給する施設である。

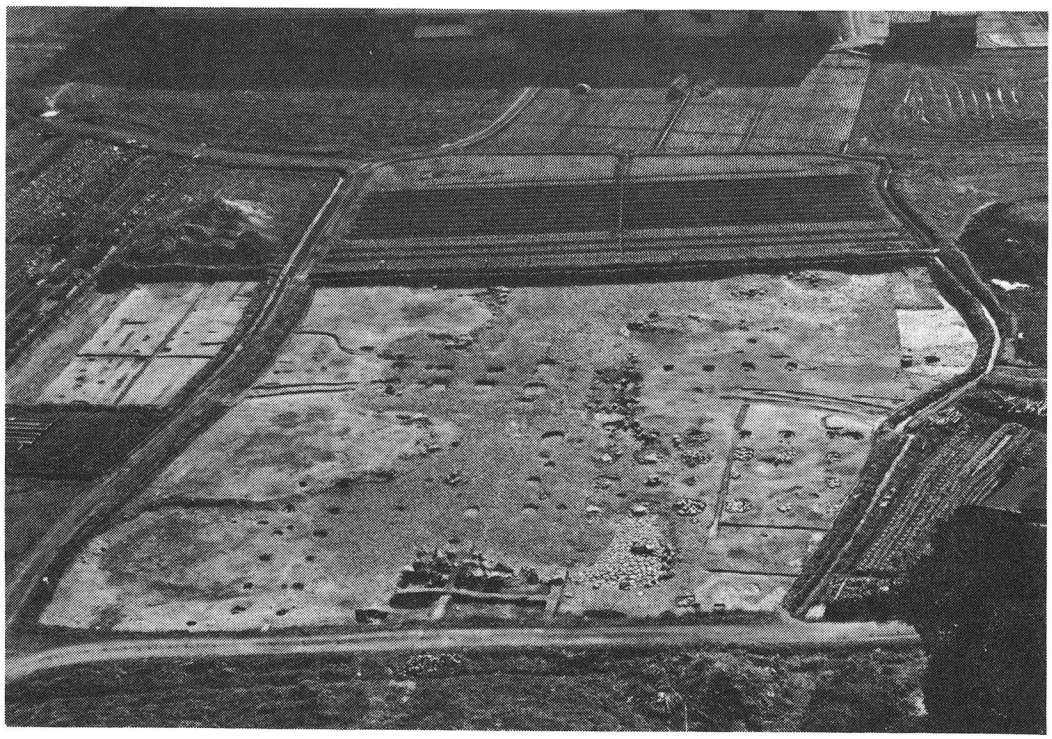
２　Ｂ期遺構

Ｂ期の遺構としては、園池ＳＧ５８００Ｂを中心に礎石建物１、柱囲い２、塀１、掘立柱建物１、桟敷１、渡廊１、橋１、溝１がある。すでにのべたように、Ｂ期は２小期に細分される。

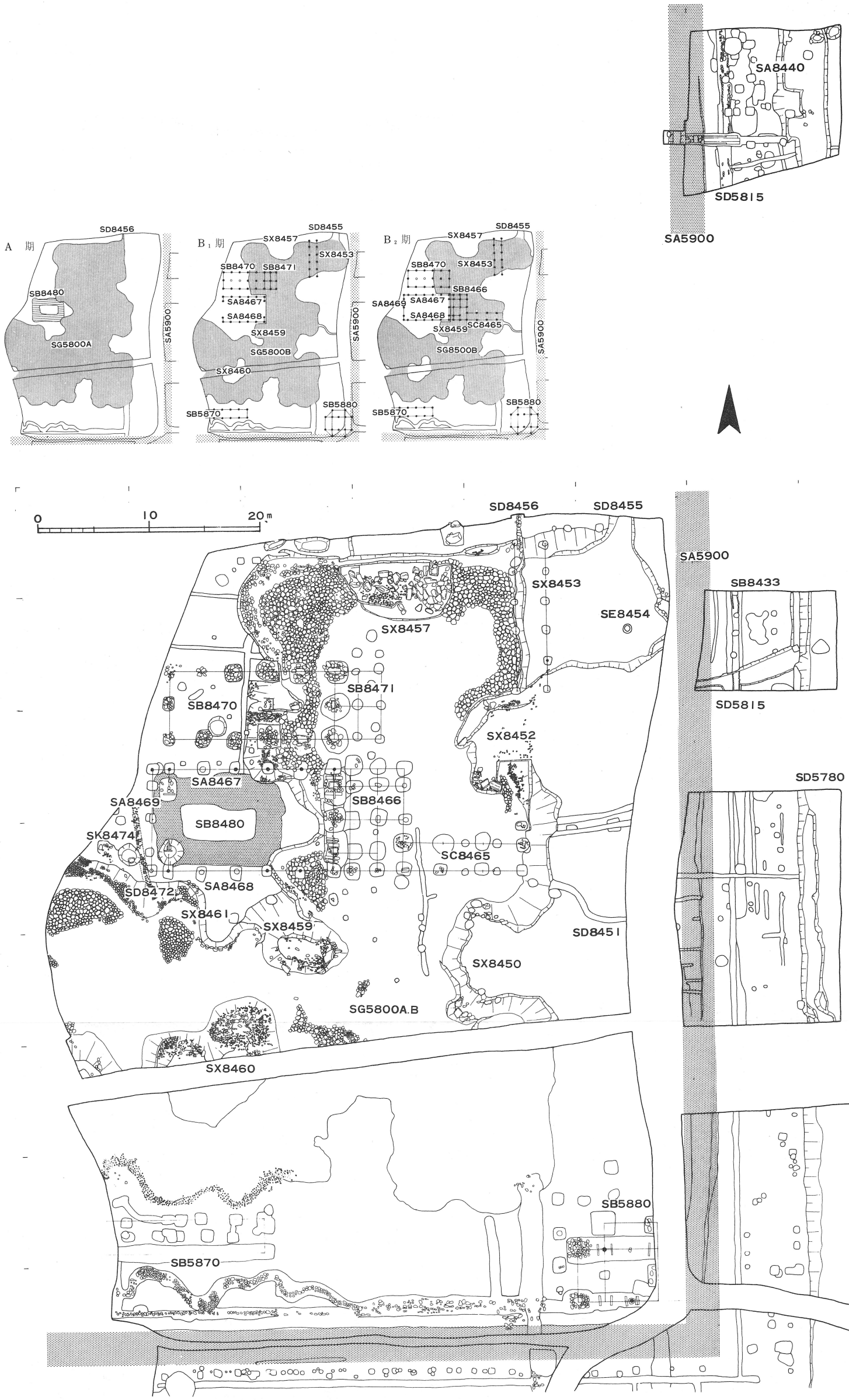
園池ＳＧ５８００Ｂは下層園池の上で全面的に改修した園池である。下層の石組や石敷などの施設を取りはずし、底から岸辺にかけて全面に暗灰色粘土を敷きつめ、そのうえに１０㎝内外の厚さで玉石を敷いている。池の概形は下層園池を踏襲するが、東北隅を東方にひろげてほぼ大垣の位置までのばしている。これは

給水路ＳＤ８４５５を東によせたためであろう。ここには曲物を埋込んだ湧水をとる設備がある（ＳＥ８４５４）。岬や入江の出入は深いが、池底を埋立てたため水深３０㎝内外の浅い池となる。東岸に岬２（ＳＸ８４５０、ＳＸ８４５２）が突出し、大きな縞状片麻岩や安山岩の石組痕跡がある。西岸屈曲部は半島状に突出し、先端に石組痕跡をとどめる（ＳＸ８４５９）。北岸中央部にほぼ原形をとどめる石組の築山がある（ＳＸ８４５７）。この石組は大きく、最大径１ｍ前後の安山岩や片麻岩の岩石を樹てならべている。第４４次調査で南半を確認している中島の北半部を発掘区の西南隅で検出した。やはり汀線に玉石をしき、片麻岩の石組痕跡がある。

礎石建物ＳＢ８４７０は園池の西岸にあり、東の部分を池中に没する東西棟礎石建物である。その規模は桁行５間（１５ｍ）、梁間２間（６ｍ）、柱間寸法はともに３ｍ（１０尺）等間である。柱位置の多くは根石によってくるが、池中に



第４図　園池SG5800 B（北から）



第５図　第99次調査遺構図

没する東妻柱などには三笠安山岩を用いた5個の礎石を残す。棟通りの東から2間分には小礎石と根石があり、床張りであったことがわかる。付近から桧皮や瓦が出土しており、桧皮葺で棟に瓦をのせた屋根を想定しうる。東妻から東西2間（3.6 m）、南北2間（6 m）の掘立柱がのびる。柱穴が小さくかつ浅いので、桟敷のごときものを付設したのであろうか（ＳＢ８４７１）。

柱囲いＳＡ８４６７・ＳＡ８４６８は礎石建物の前面に建つ。ＳＡ８４６７は北、ＳＡ８４６８は南にあり、ともに東西5間（１５ m）の掘立柱列。おのおのの東西両端柱の内寄り1.5 mの位置に大型掘立柱を建てる。柱根はすべて八角形である。一般には径２４ cm程度だが、四隅内寄柱は径５６ cmと大きく、横木を挿入した根がらみ痕跡がある（後述の建物ＳＢ８４６６の礎板として大型柱根が転用されていた。一方、建物ＳＢ８４６６から疑灰岩の八角柱根巻石や面取りのある板石が発見されており、柱囲内の地面が切石によって舗装されていたことが想定できる。大型柱の性格は明らかでないが、鳥居のごときものかもしれない。

以上の遺構がＢ期のなかでも古い時期（B_1期）に比定しうるものである。つぎにＢ期のなかでも後に改修された遺構（B_2期）についてのべよう。

塀ＳＡ８４６９は、柱囲いＳＡ８４６７、ＳＡ８４６８のうち西方の大型柱を撤去したあと、西面の囲いを外へひろげたものである。すなわち、1.5 m西へのばした位置に、4間（1.5 m＋3 m＋3 m＋1.5 m）の掘立柱塀を増築する。

建物ＳＢ８４６６は柱囲いＳＡ８４６７、ＳＡ８４６８の東の池中に浮ぶ。この遺構も東方の大型柱を撤去したのちにつくるが、構造がやや複雑である。すなわち、柱囲いの東端の柱を利用して南北4間（9 m）、東西3間（6.3 m）の総柱をたてる。この遺構が、床のみの桟敷様のものか屋根をもつのか明らかでないが、柱間隔が変則的なことや柱囲い広場の池中への拡張ということを考慮して前者を想定したい。南北の柱列を結ぶ西側の柱列にそって灌木を利用した杭（ＳＸ８４８６）があり、西岸の護岸がこのあたりにあったことを示す。西から2列目の柱列は西方のＳＡ８４６９と対称位置にあり、この柱列のみは高さを柱囲いに揃えている可能性がある。東側の柱列のうち、南の柱間が広いのは渡廊ＳＣ８４６５とつな

ぐためであろう。

渡廊ＳＣ８４６５は建物ＳＢ８４６６の東南隅と池の東岸を結ぶ、幅１間（2.4 m）で長さは３間（１0.8 m）である。

以上がB2期の遺構だが、池の東北隅で南北に架ける橋については時期を決めがたい。この橋は長さ６間（１3.5 m）、幅１間（３ m）の掘立柱の橋脚である。

3　遺　物

園池ＳＧ５８００Ａ・Ｂを中心に多量の土器、瓦類、木製品、自然木、種子などが出土した。とくに上層園池からの出土量が多い。

木　簡

礎石建物（ＳＢ８４７０）の東妻柱付近における上層園池の堆積土層から付札２点が出土した。それは布の給付に関するものか、「貞雄方一丈」、「忠安方二丈」とかく。同じく上層園池東北隅砂浜にある遺物堆積土中から、「第十五槽」とかく付札が出土している。

瓦　類

軒平瓦１００点、軒丸瓦９６点、鬼瓦２点、面戸瓦１点、緑釉平瓦２点、水波文塼１点、塼類などと多数の丸平瓦が出土した。

平城宮瓦Ⅰ期（和銅〜養老年間）の瓦は、軒丸瓦５点にとどまる。Ⅱ期（養老〜天平年間）の瓦としては軒丸瓦２４点（全体の３4.2％）、軒平瓦２３点（４4.0％）があり、出土量の大半を占める。それらのうち６２２５、６３０８、６６６３、６６８１型式が多数を占める。Ⅲ期（天平勝宝年間）の軒瓦は、軒丸瓦１９点と軒平瓦１３点とであり、６２８２、６１３３、６２９６、６７２１、６６９１、６６８９型式で構成している。Ⅳ期（天平宝字〜神護慶雲年間）の瓦には６７６０、６８０１型式などがあるが、少量である。

第６図　SB 8466 出土鬼瓦

鬼瓦のうち１点は建物ＳＢ８４６６の南側柱の礎板に転したもの。押熊瓦窯跡

出土の鬼瓦に類似し、Ⅱ期に属する。他の１点は礎石建物ＳＢ８４７０の東南隅柱付近から出土した。

下層園池の底（灰色砂面）からは６２２５、６６６３、６６６８型式が出土しており、すべてⅡ期に属する。上層園池のバラス敷からはⅡ期瓦とともに６２８２、６１３３、６２９６、６７２１、６６９１Ａ型式などⅢ期の瓦が出土した。上層園池の堆積土からは、Ⅱ・Ⅲ期瓦とともにⅤ期の６７６０、６８０１型式の瓦が出土した。

このような状況から、Ａ期の掘込地業建物（ＳＢ８４７１）には平城宮瓦Ⅱ期の瓦を葺いていたことが想定できる。Ｂ期の建物はⅡ、Ⅳ期の瓦を混用するが、Ⅲ期の瓦を主体としていたことがうかがえる。

土　器

土師器、須恵器、施釉陶器とともに、磁器や瓦器が出土した。

施釉陶器　上層園池の西岸の礎石建物付近の堆積土や整地土層から集中的に出土した。緑釉陶器としては香炉蓋、三足盤、皿など１０点がある。灰釉陶器は皿、杯、三足盤、瓶などの２０点である。いずれも平安時代初期の型式にぞくする。

黒色土器　量的に少ない。小型壷、三足盤、杯、皿、風字硯などが出土した。いずれも上層園池の堆積土からの出土で、施釉陶器と同時期である。

土師器、須恵器　上層園池の堆積土から多量の平城宮土器Ⅶ（８２５年頃）にぞくする土師器、須恵器が出土した。それらは東西の岸辺でかたまって発見された。なかに墨書するものがあり、判読できるものに「蔵人〔所カ〕□」、「宮」、「□道」、「…為嶋在……応□」、「土〔義カ〕□」、「…互…」などがある。

下層園池には小量ではあるが、平城宮土器Ⅲ（７５０年頃）の土師器・須恵器がともなっていた。

木製品

木製品や建築部材など２３８点が出土している。いずれも上層園池にともなうもの。

建築部材としては柱囲い（ＳＡ８４６７、ＳＡ８４６８）の大型柱の八角形柱、

根がらみ材、根太、楔などがある。上層園池の堆積土から出土した斗形の雛形は注目すべきもので、八角円堂の部材であり、第４４次調査で発見した八角円堂との関係が想定できる。また東岸の付近からは桧皮の出土が顕著であった。

木製品には挽物円盆、蓋、高杯、曲物、杓子、箆、箸、漆器蓋、布巻き軸、杵形、下駄、削り掛けなどがある。いずれも上層園池にともなう。

金属製品ほか

上層園池にともなって、鉄釘、鉄鎌、銅留金具、和銅開珎、神功開宝などが出土した。また、砥石や紡錘もあった。

植物遺体

上層園池の堆積土層には多くの種子や木葉があった。内容はマツ類の球果、モモ、クルミ、ウメ、ヒシ、アラカシ、センダン、アシ、ミクリなどの種子とアラカシの葉であった。ほかに水草も多い。

B　東面大垣地区(６ＡＬＦ－Ｅ・Ｄ・Ｈ)

園池地区の東側は、東面大垣に比定されている里道が一段高くのこり、外側に坊間路の幅をたどりうる約３０ｍ幅の水田が南北につらなる。外濠の推定線で史跡指定がなされているため、調査範囲は水田の半分に限られた。

１　遺　構

検出した主な遺構には、築地大垣、同東雨落溝、東面外濠、暗渠、塀、掘立柱建物などがある。

築地大垣ＳＡ５９００は、第４４次調査で確認した南端から、１１３.０ｍ北方まで調査したことになる。Ｅ区ではすでに削平されていたが、Ｈ区では基底部がよく保存されている。築地本体は道路敷のため幅員などを全体にわたって明らかにしえなかった。築地は後述する東雨落溝のあたりから掘込地業を行い、本体は版築でかためる。築地本体の幅は約３ｍである。

大垣東雨落溝ＳＤ５８１５は、築地の端から東へ約１.５ｍをへだてて南北にのびる。幅７０～１１０cm、深さ４０cm程度で、砂質土が堆積する。Ｈ・Ｄ区では両

側を丸平瓦で護岸している。

暗渠ＳＤ８４３６は、Ｈ区において築地下を流れて宮外の外濠ＳＤ５７８０に排水する暗渠である。暗渠は幅1.2ｍ、深さ５０㎝の掘形をおよそ東雨落溝を横断するあたりまで掘りこみ、そのなかにヒノキの板材で組上げる。現在蓋板をとどめないが築地本体にあたる部分は、凝灰岩切石で補強する。東雨落溝と外濠との間にある壗地の間は素掘りの開渠となる。なお、外濠が埋立てられたのちは、流路を南に変えている。

東面外濠ＳＤ５７８０は、東雨落溝から幅約５ｍの壗地をへだてて南流する大溝であり、二坊坊間路の西側溝でもある。溝の幅員は６ｍ内外、深さ６０㎝内外で、護岸の施設などはない。Ｅ・Ｄ区では細かい砂が主として堆積するが、Ｈ区では粘質土が堆積し多くの遺物を含んでいる。Ｈ区の南端の暗渠ＳＤ８４３６の流入する部分は一種の凹みを呈し、多量の木筒が出土した。木簡のなかに天平末年の年紀をとどめるものがあり、廃絶時の１点をしることができる。また、外濠の堆積はこの下にもあり、そこからは平城宮土器Ⅱが出土する。

Ｈ区の外濠は奈良時代の後期に埋立てられ、壗地から外濠の直上にかけて柱穴がある。

２　遺　物

遺物は主としてＨ地区から出土し、Ｅ・Ｄ地区からの出土量は少ない。

木　簡

１６５点の木簡と４１４点の同削片が出土した。それらはすべて外濠からの発見であり、なかでもＨ区の出土量が多い。その内容は、平城宮内の食料関係を扱う官司の文書類に集中しており、一括遺物としての性格をもつ。また天平１５、１８、１９、２０年の年紀がある。そうした木簡のなかに「東籠」と記するものがあり、園池地区を東籠に比定しうるかもしれない。

土　器

多量の土師器と須恵器のほか、小量の灰釉陶器、青磁、墨書土器がある。外濠の下層から平城宮土器Ⅱ（７３０年頃）が多量に出土しており、外濠の存続年代

をしることができる。墨書土器としては「宮」、「佐良　酒坏」と記すものがある。

施釉陶器としては、緑釉皿、灰釉皿が整地土から出土している。

瓦塼類

瓦類は、大垣に葺いたものとみられ、軒平瓦６９点、軒丸瓦９２点が出土した。主なものは平城宮瓦Ⅱ期の瓦で、６３０８、６２２５型式などの軒丸４０点（４3.5％）、軒平瓦３２点（４6.4％）である。Ⅲ期に属する６２８２、６１３３、６７２１型式は、軒丸瓦２１点、軒平瓦２９点である。Ⅳ期以降の瓦は少なく、６１３８、６７６０型式が各３点出土したにとどまる。こうした瓦の多くはＨ区の瓦溜ＳＫ８４４１から出土した。

木製品

外溝などから、糸わく、槽、曲物、杓子、砧状厚板、櫛、人形、木釘、漆塗皮製品、円座、むしろなどが出土した。

Ｃ　おわりに

先年からの第３９・４４次調査などによって、東院が奈良時代前年（天平初年）にはすでに造営されていることが明らかである。今回の調査でも、東面大垣の所用瓦、外濠下層出土の土器などの年代は、さきの推定と矛盾しない。もちろん、６ＡＬＦ−Ｈ地区の外濠にかぎれば、奈良時代の後半に埋められ小路からの導入を容易にしたことがうかがわれる。

大垣内に形成する園池遺構の造営年代を決める手掛りをえることはできなかったが、これに先行する奈良時代の遺構は存在せず、東院の成立当初から園池として計画されていた可能性がつよい。下層園池は破壊されている部分が多いが、ほぼ輪郭をたどることができる。岸辺に沿って扁平な石を敷きつめるなどの技法は、前年度に発掘した左京三条二坊六坪の北宮園池と類似しているが、その縁辺に玉石を竪にならべるなどの技法はみられない。北宮園池よりも作庭の時期が下るためであろう。この園池は西岸に建つ基壇建物から観賞するのであろうが、ここに至るまでの道路などの施設については今後の調査にまたなければならない。

上層園池への改修は出土遺物によって天平勝宝年間に想定しうる。この園池は、岸や底を玉石やバラスで敷きつめるため、下層園池とはかなり趣きをことにしている。石組の中心を北岸の中央におき、西岸につくる礎石建物、柱囲いなどが主殿になっている。さきに調査した東南隅にある八角円堂とは柱を八角形につくるなどの共通点があり、一貫した様式の建物で揃えていたことが推測される。その後、池中に桟敷状の舞台をつくり、渡廊をへて東岸にわたる施設が増置されるが、その基本構造は変化していない。

こうした上層池は、平安時代まで存続する。最終段階の遺物として施釉陶や木器の食器類が、主要殿舎であるＳＢ８４７０付近に集中し、一般の土師器や須恵器が東岸北部に集中していることは、利用状況をしる一つの手掛りとなる。